「山月記」を読む位置

――生徒の位置・小説の位置・授業の位置――

竹盛浩二

「作中詩に凝縮された李徴の心のうちを説明せよ」

一九九九年度、高校二年生の授業。

「山月記」を私が朗読する。一読後すぐさま「作中詩に凝縮された李徴の心のうちを説明せよ」という課題を提示し、これについて自由に書かせる。そこから授業は始まった。

課題のねらいは二つ。一つには、李徴が虎になる経緯を読み取らせるため。さらには、その後の李徴の自己分析の進展を読み取り、確認させるためである。

ともに読み深める授業(注)

授業では、さまざまな読みを受けとめていきたい。全員のものをとりあげるには困難がともなうが、その代表的な読みについて、ともに検討していくようにしたい。そこで、生徒の書いたものをピックアップし、プリントにして、それを読みながら、生徒がどのように読んでいるのか、確認をしていくことになる。必要に応じ、それぞれの生徒に、さらに説明を求めることもある。

「山月記」における「語り」と「詩作」の意味

「山月記」という小説のなかの「語り」の意味と、「詩作」の意味を考えてみなければならない。

この漢詩は「今の思いを即席の詩に述べてみようか。」と詠まれたものである。次第に虎になっていく悲しみと、それでもなお燃やし続ける詩への執念を、李徴は哀傷に対してひとつひとつ語ってきたのだが、その「今の思い」が、この漢詩に詠まれているのだ。

即断が過ぎるかもしれないが、「山月記」において、「語り」は「弱さ」を、「詩作」は「強さ」をもたらす、ということだ。「語り」のなかで自嘲苦悩し、悔恨と呵責の念にとらわれる。ところが、「詩作」においては、自嘲・自虐から反転して、「語り」において出会えた自分の、その意識が強固に自分を鎧うのだ。

自己の醜悪なる内面を摘出して苦悩しながらも、鋭く自己認識しながらも、それでもなお最後の自己を愛してやまない、そんな李徴の不思議な韜晦を、「山月記」を読む者は、かくして、じつにリアルに感じ取ることになる。李徴の悲しさとプライドと言い換えてもよい。

それをつかみ取るのだ。そうなのだ。先の「作中詩に凝縮され

た李徴の心のうちを説明せよ」という課題は、じつはこれをつかみ取らせようとして、設定したのだ。

読みの深化をうながす読み

だから、次のような読みをする生徒がクラスに三人も出てくれば、もうしめたものである。

■　虎となってしまった李徴ではあるが、かつての博学才穎である李徴も未だ健在である。しかし、彼は自分が虎になったということから目を背けることなく、事実として受け止めている。

いや、むしろ自分は虎であるべきだ、とさえ思い始めている。自分の自尊心のあらわれであるこの虎の姿と、家族を心配する前に自分の才を惜しむこの心、もはや人間として生きてゆけるはずもない、というような気持ちをもち始めている。

さて、これはあくまで小説全体を通しての李徴の姿であり、右の詩に込められた気持ちとは少し違う。書く必要はなかったのだが、途中で違うことに気付いたから仕方がない。

では、詩に込められた、いや凝縮された気持ち。…ん、あ、そうか。込められたならともかく凝縮されていたのなら、前述のようなことでもよかったのかもしれない。まあ、よし。詩の内容もふまえて気持ちを説明していこう。

（SH　男子）

■　李徴は、かなり自虐的にこの詩をよんでいる。例えば、「君は已に軺に乗りて気勢豪なり」という句はあきらかに、まじめにつとめて、軺に乗ることができるようになった哀傷と、虎になってしまった自分を比べているし、「長嘯」をせずに「嘷」するだけだといった意味の句が詩のシメである最後によまれている。

しかし中には「偶」といった字や「災」という字のように、自分のせいで虎になったのではないといったニュアンスの文字も入っている。

おそらく、この詩をよむ前、まだ李徴は虎になってしまった理由が自分の中でまとまっていなかったんだと思う。そして、この詩をよむことによって、李徴は自分の気持ちに整理をつけて、この詩の後に続く言葉を言ったんだと思う。

（YA　男子）

■　この詩からは李徴が虎になってしまったことに悲しみや恐れは感じられない。また本文から、詩を詠む前に人間の心が消えてしまうことへの嘆きが読み取られるが、詩を詠んだ後にはそういった気持ちが捨て去られている印象がある。そういったことからこの詩は、李徴の心の中で何らかの区切りとなったもののように思える。

李徴は詩で、自分が虎になることを再確認している。これは李徴が虎になる現実に目をそむけないという決心だと思う。そして次の「災患…」は、人間に戻ることへのあきらめというよりは、ここもやはり虎になることへの強い決心といえる。

後半は、虎となった自分の様子をさげすみ人間である友の

立派さをたたえ、表ではうらやましがっているようだが、内心は復讐心のようなものを持っていると読める。自分は人間の世界ではいまいちであったが、そのくやしさから虎となっても幸せになってやるというような気持ちもこの詩に込められているのではないかと思う。

（YH　男子）

これが突破口となる。後は、生徒たちの様々な読みを、重ね合わせていくだけである。

別のクラスでは、少し事情が異なる。次のような読みが提示される。

■　人間だった頃の李徴の性格（強気でありながら実は小心者なところもあり、自嘲癖があるなど）を含んだ、やりきれない気持ちのよく表れた一編だと思います。

これはこの詩だけではなく、むしろ哀惨との会話の中によく表れているかもしれないけれど、李徴の高いプライド、それに表れる自嘲癖の影には、彼の弱さ、本音がよく表れているのではないか、と思います。「俺はこんな奴だ、どうか笑ってくれ」といったことの後には必ず、「そうは言っても俺だって…」といった、自分を少しでも正当化するような会話が入っている所からそう思いました。つまり、彼はどこかでこんな自分を誰かに認めてほしかったのではないか。「どうか笑って」のウラには「そんなことはない」と心から否定してくれる人を求めていたのではないか、ということです。もちろん彼もこういった自分の本音、弱さに、多かれ少なかれ気付いていて、それがますます彼が自分自身を卑下するのをひどくしている。一方では、ますます人間離れしていく自分にとてつもない不安を感じている。（特に最後の句から感じ取れる）

彼の心の中では、弱さとそれを隠そうとする強がりがいつも葛藤していて、そんなことを考えなくなる時間（＝虎になる時間）に、彼はそのしがらみから解放され、しあわせになれるのではないかと思います。

こういう心の葛藤は、いかにも人間らしく、だから彼は「もっとも人間らしい、可愛そうな一匹の野獣」だと思いました。

（TS　女子）

■　（前略）次に、李徴は、自分が虎になったことを「運命」のせいにしようとしていると思う。一番初めに、「偶」、次には「不可逃」というふうに言っている。でも、本当は、「思い当たることが全然ないでもない」と言っているように、自分がそうなることが分かっていて、それでもやはり認めたくないとか、後悔とかそんな気持ちが働いている。それとも、詩人である李徴は、その血が騒いで、「偶」という設定にした方が、詩全体のまとまりとしてよいと思ったのだろうか。確かに、そっちの方が、運命的で、空想の世界に引き込まれる感じもする。それに、「偶」としたことで、李徴自身でなく、自分の中にもう一人自分をつくり、それを客観的に見ようとしたんじゃないか、とも思う。いずれにせよ、まだまだ現実を認めたくない、臆病な李徴の表れのように感じた。

この二人に聞きながら、その読みをさらに膨らませていく。そうして、李徴の心の内を読み解き、読み深めることができる。だから、授業はずいぶんと緊張感があり、充実しているのだ。

だが、何かがおかしいのだ。

（KW　女子）

「山月記」と生徒の自己

生徒は、さまざまな角度から「山月記」に迫っていくのだが、しかしどうも深入りして来ないのだ。たとえば「虎」になった李徴の運命について考えてみようとすれば、生徒は己の問題に向き合わざるを得なくなって、そこで追跡を途中で打ち切ることがある。あるいは冷静に鮮やかな分析をしてみせても、それがきわめて客観的であるならば、ここでも読みの主体の顔は隠れていると言わざるを得ない。

このように「山月記」では、「自分自身」をどの位置に置いて捉えるかということが、とりわけ問題になってきそうである。

「山月記」を読む生徒の位置

私は意気込んでいる。しかし、生徒はそれほどでもないのだ。なぜなのか。

一つには、平板な読みにならないようにと考えて仕掛けをするために、考えさせようとするために、結論だけを聞いて理解しておこうというだけの生徒にとっては、煩わしいのかもしれない。そういう生徒には、授業する私自身、授業の中でふと戸惑うことがある。だが、ここで問題にしたいのは、そのような、考える姿勢がどうも最近みられなくなってきたという生徒の主体性の問題ではない。

そうではなくて、この「山月記」独特の作品構造に目を向けてみたいのだ。かといって、作品論を展開しようというのではない。もちろん、教材研究として作品論は必要なのであって、作品論を否定しようなどという魂胆ではない。それなら、「作品構造」という言葉は誤解が生じるではないか。わかりやすく言えば、「山月記」に生徒がどのように向き合うのかという問題である。「山月記」を読む生徒の位置の問題なのだ。それは結局「作品論」と真正面で切り結ぶ問題なのではあるが、読者である生徒の読みの方に重心を置いてみたいのだ。そうすることで、「山月記」の授業で感じるもの足りなさについて考えてみたい。

生徒の読みは深い。しかし、自分を出していない。なぜか。

「山月記」を読む生徒の位置を探る

「山月記」を終えた後で、あるクラスでは時間調整のために、小松左京の「霧が晴れたとき」を読んだ。

この小説は、読むものを引き込む不思議な力を持っている。あらましは、こうだ。ある家族が休日にハイキングに出かける。そこで彼らは不可解な事件に遭遇する。不気味な霧の中で人間が姿を消してしまうのである。「私」と「息子」を残して、地球全体が〈マリーセレスト号〉のようになったのではないかという恐怖

をいだく。そんな、SF小説である。

生徒は、この小説をのめり込むように読んだ。その点では「山月記」と変わらない。だが、生徒の読後の表情がどうもちがうのだ。そこで、私は生徒に向かってたずねる。

「君らは、あの『山月記』の時に、何故かのって来なかった。どうしてなんだ？……二つの小説を比べてみて、書いてくれないか。」（このような設定で、実は生徒にもっと自分を出させたいのだ。）

どちらの小説が生徒にうけいれられやすいのか、これが問題なのではない。これを問題にしながら、「山月記」と生徒との距離を測量してみたいのだ。生徒の位置を探ってみたいのだ。

生徒たちは、次のようなことを書いている。

「霧が晴れたとき」がいい

① 「霧が晴れたとき」は、普通の言葉で、登場人物も自分と置き換えることができたし、本文中に「マリーセレスト号」という事実が入っていることで、この話が、今、ここで起きても不思議ではないなぁと身近に感じることができた。身近に感じる話の方が読みやすいし、リアルで心に残る。

（SU　女子）

「山月記」がいい

① 「霧が晴れたとき」がなじみやすいのは、現代の人間観にぴったりあてはまっているからだと思う。人間は機械や情報に支配され、すっかり人間を失ってしまった。霧に飲み込まれる人間というのはまさに今の私たちだと思う。一方、「山月記」は、まだ「人間」を一番強いものとしてみているような気がする。

（SS　女子）

② 「山月記」は、これこそ文学的作品というのだろうなあと思った。

「霧が～」は、おもしろいのだけれど、それまで。SFだから「SF的な魅力にひかれておしまい」だと思った。だから教訓話みたいな「山月記」とは違って「霧が～」はガムみたいにかめばかむほど味は出るけど、そのうち捨てなくちゃならないし、「山月記」はスルメみたいに初めはおいしくないけど、後からそのおいしさがわかってくる話だなと思いました。

（AO　女子）

③ 私は中島敦の「山月記」の方が好きだ。山月記には大物のオーラを感じる。その点、小松左京の「霧が晴れたとき」には安っぽさを感じる。わかりやすくいうと、「山月記」はずっと家においておきたい一品で、「霧が晴れたとき」は、一度読んだらすぐにでも古本屋に売ってかまわない本である。ただ「山月記」は漢字が難しくて、かたいので、何となく距離を置いてしまうのでは。深く考えない方がいいと思うよ。

（AY　女子）

④ 「山月記」の李徴は、私とはかけ離れている。何かをきわめようと思うがゆえの李徴ほど孤立してはいないし、ある程度気持ちをわかってくれる友達も、私にはいる。だから、

「山月記」は初めから非現実的なこととして読んでしまう。そして結局そのまま終えてしまう。私だけでなく、李徴や紀昌のような人はまわりにもいない。「山月記」は名作だっていうことはわかるんだけど、「どこがおもしろい」というのはなかなか答えにくい。「おもしろい」とか「すき」よりも、もっとすごい作品のような気がする。

（YH　女子）

⑤　「山月記」はあくまでも李徴のことであって、自分はそれを観る方にあったから、どんなことがおきても平気だった。最後の部分では、感動した。この人は、こう思ってたんだろうな、と思えるゆとりもあったから、感動できたのだと思う。

（NN　女子）

⑥　「山月記」には感動がある。かつての友人との熱いきずな、自分の本性の中で芽生えてしまった虎という猛獣におびえながらも、かつての自分も深く反省し、詩を作った李徴の姿など、僕にとっては、こんな作品は読んだことがないと思えるくらいよかった。「山月記」には僕の心を打つ何かがある。

（MI　男子）

⑦　「山月記」は文章がかたいし、非日常的だし、虎になった理由がわからないにしても、虎の正体が李徴で、本人が虎になった理由らしきものを語っていて、ほとんど謎を残すことなく完結しているんですね。

（TN　男子）

⑧　「山月記」には、読者をたじろがせ、一歩ひかせてしまうような強い勢いがあると思う。最初からぐいぐいと進んでいっている。難しい語句もあったりして、入って行きにくい。けれど、重ねて読んでいくと、人物の思い詰めた気持ちを語る勢いのある文章は、大変うまく描写されていて、すごいなあと思わせる。

名作といわれる作品はとりつきにくい。

（RT　女子）

⑨　「山月記」は、普通に読んでいって、この話は何を言いたいのかと一生懸命考える、授業向けの話のような気がする。いろいろ難しいことが書いてあって、それを何とか理解しようとする、という感じであって、楽しむことはできなかった。

（TH　女子）

⑩　「霧が晴れたとき」を気持ちのすさんでいる時に読んだとしよう。アホクサーと真面目に読めないだろうよ、きっと。かと言って、そういう情緒不安定な時に「山月記」を読むのは危険極まりない。ポジティブな人は冷静に人生見つめ直すかもしれないけど、ネガティブな人だったら、それこそ思いつめて自殺とか考えちゃうかもしれない。どっかの出版社のキャッチフレーズにもあった「読みたいときに、読めばいい」。正にその通り。無理して読みたくない本を、気分ののらない時に読むものではない。ただし読解は別だけどね。

（SO　女子）

「山月記」は、「李徴」という人間の自意識の中で完結している作品である。そういう意味で、読む者は身じろぎできない作品である。しかも客観的にしか読めないところがある。「山月記」

を読む者の中に、「李徴」の「語り」（弱さ）への同情が生まれ、加えて、「詩作」（強さ）への近寄りがたさがつくられるとすれば、読む者は無口な観客になるほかはない。そしてただ「すごい」作品だと、感動するだけなのだ。かりに読む者がそこに自分をいくらか重ねてみたとしても、いまは、読む者の自意識の中で閉じるしかなく、しばらくは出口もなくさまよい続けるべきものなのだ。だから、安易にことばになどできるものではない。生徒にとって、授業では、「山月記」は、ひとまず「読解」を楽しむだけのもの。

①～⑩のような生徒のことばを作品構造と対応させながら理解すると、以上のようになるだろう。

授業での私の疑問の霧は、晴れてきた。「山月記」を授業で読む生徒の位置は、こういうところなのだ。やはり、そうなのであろう。

では、生徒の中で「山月記」は、この先どのような意味を持って生き続けるのだろうか。

生徒の中での「山月記」の位置

一学期最後の授業、最後五分間、あるクラスで簡単なアンケートを実施した。

「山月記」にどれくらい感動したのかという問いには、ほとんどの生徒が強いレベルの回答を寄せている。また、授業で読んで約一ヶ月後、生徒の内面で「山月記」がどのように生きているのかについて、自分にとって「山月記」は何だったのかと問うてみた。以下に掲げるのはその代表的なものである。

① 内容的には今思うとすごく良いと思う。習ったときには文章が難しくて、とっつきにくいと感じたけど、少し間をあけた今、そんな思いはないです。

虎になるという非現実的なことが、ある意味違和感を感じずにうけいれられる。李徴の気持ちもすごく細かく書かれているし、終わり方もとてもいい。

難しいけど、好きな小説の一つです。（NH　女子）

② 人間の内面的な弱さを李徴という人間が虎になることを通して見事に描いた点に感動した。（HY　男子）

③ やっぱり、虎となった李徴が最後に詠んだ詩が感動した。李徴の気持ちが詰まっていて、とても悲しくなった。人間であるときも虎になった今も孤独で、そんな人生の中で唯一といっていいくらいの友人袁傪に最後に会えたときの複雑な気持ちが伝わってくる。（TE　女子）

④ 読んでいると自分はいつのまにか主人公になっていて「山月記」のパワーに心をかき乱される。そして読み終えたとき、ふっと現実にかえって考えてみたときの快感が「読みごたえがある」＝「感動」につながるのではないかと思う。（ZW　女子）

⑤ 文章表現の上手さと内容の良さはすばらしいと思うが、いまいちどこかがしっくりこないような気がする。少し深く入りにくいところがあり、なじみにくいような、そうでない

ような。　（NK　男子）

⑥　自分の心の解析を明確にとらえていくところがおもしろい。自分の心というのは一番分かっているようで、本当は分かっていないところが多いし。まぁ、認めたくないのもあるけど。　（YT　女子）

⑦　虎になった李徴が自分の性格について話しているところで、私自身にもあてはまるところがけっこうあって、最後までどうなるのか、夢中で読んだ。最後に何か心を揺り動かされるものがあったと思う。　（NT　女子）

⑧　程度はさておき「山月記」を読んだとき、自分にあてはまることがあった。李徴のいう「羞恥心」である。「山月記」を何度か読み返しているうちに自分にもこれがあると気づいてのだ。「山月記」は、自分にとって鏡のようなものだったかもしれない。　（YT　男子）

⑨　私の中にある自己嫌悪とかと重なってしまうところがあった。人の一生とは何かをすることだと思っていたけれど、そうではないらしい。

これを読んでいろいろ思うところはあるのだけれど、深すぎてよく分からない。この小説に納得できないところもあるし、共感してしまうところもある。最近感情がぐちゃぐちゃで心の中の整理能力がありません。

でもそいういうぐちゃぐちゃ状態にひきこむきっかけを与えてくれた本の一つでした。今は、よくわかりません。　（SF　女子）

⑩　僕は高校になって塾に行くのをやめたし、日曜日にはサッカーの練習はないはで、時々一日中ほとんどだれとも話さない日があります。李徴は元からあまり話す人がいないし、虎になったら他の動物も話す前に逃げるそうなので、とても寂しいだろうなと、少し共感がありました。　（KM　男子）

総括すれば、「山月記」は感動的であったということである。時間も経過して、生徒は余裕をもって書いている。読んだ時の思いが、素直に語られ、違和感をいくらか残しながらも、「自分」を語りはじめた者が目につく。

ここまで来れば、「山月記」に向かう生徒の位置はもはや問題ではない。問題なのは、生徒の中での「山月記」の位置ということだ。それは、生徒それぞれが、今後いかに自分と向き合うかということだ。ためらいながら、見定めながら、どのように自分を「表現」するかということだ。

小説読者としての生徒の心と授業の定位

授業の中での不思議なもどかしさに端を発し、「山月記」固有の構造や価値をめぐりつつ、「山月記」を読む生徒の位置について、現実の生徒の声をもとにしながら考察してきたが、最後に、次のような問題や課題を確認しておかねばならない。

まず、授業において「山月記」を読むときの生徒の位置と、そして授業後の「山月記」の位置とは、どうも同じように考えてはならないということである。それにしても、これはあまりにも当

然のこと。だが、こういう問題は、「山月記」のみならずさまざまな作品に即して、ひとつひとつ検証されなければならないことのように思える。

そもそも、小説の読みというものは、授業のなかだけで完結するものではない。授業で読んだ小説が、その後の人生のなかで折に触れて鮮やかによみがえり、己の中に生き続けていく場合がある。いつのまにかどこかに忘れ去られていく場合もある。読み手によって、小説の位置はそれぞれ異なる。授業においても、小説を読む生徒の位置はそれぞれ異なる。だからこそ、それをたたかわせていくことができるのであるし、そこに授業における読みの深化がはかられるのだ、と言いたいところなのだが、しかし、生徒が教室の中で自分自身を語るということは、非常にむつかしいことである。小説を読み、小説の世界に自己を照らしていくと、教室においては、その自己は自閉したままで開かれないことが多い。

小説の読みは、きわめて個別的である。そしてまた、小説の読み方は、ひとりの読み手においても変化していくということからもわかるように、長い時間のなかで捉えなければならない。小説の読みの永遠性とでも言うのか。小説の授業は、これらの問題を視野に入れて構想されなければならない。ところが、生徒の位置と小説の位置について、そのように捉えていくと、授業、特に生徒が主体的に考える授業をめざしながら、それをどのように定位するのかという問題も生じる。それは、小説読者としての生徒の心を授業のなかでどのようにみていくのかという問題でもある。

【注】

拙稿「生徒とともに小説を読む　森鷗外『高瀬舟』の場合」参照　（広島大学光葉会「国語教育研究　第三十九号」）

【参考文献】

田中実『小説の力』（大修館書店一九九六）
松本修「文学教材のナラトロジー話法と読者―『山月記』」（「月刊国語教育」一九九九・一）
馬場重行「〈語り〉の在り方をめぐって―中島敦「山月記」の場合」（「月刊国語教育」一九九九・八）

（広島大学附属福山中・高等学校教諭）